
ただいま 検品中

黒田容子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただいま 検品中

【Nコード】

N5260S

【作者名】

黒田容子

【あらすじ】

ガテン系女子に エリート系俺様が恋をした!?

物流センターで働く三十路ガールと本社の重役秘書のラブストーリー
通称：姥捨て山の物流部 で物流センターのパート管理として働く
蕃昌真知子。

オシャレ興味なし、恋バナ興味なし、出世興味なし。「猫でも飼おうかな」一人暮らしの独女ライフ満喫の毎日が、本社からの監査役でやって来た重役秘書との出会いで 毎日が一変。

「無駄に俺様」で、「無茶ばかり」で。確かに、「仕事が出る」

だけにとりあえずムカつく!! のはずが、アラアラ…人生って不思議な物語

プロローグ

「桜も、そろそろ咲く時期かあ」
3月も中旬が見えてきた晴れた空。誰に言ってもなく、私は空を見上げた。

ここは、都内湾岸沿いの物流センター

一応、人並みに正社員としての給料は貰っているけど、実は バリバリのガテン系職なアタシ

仕事は 通称：姥捨て山の物流部 で物流センターのパート管理として働く 蕃昌ばんしょう真知子まちこと申します。

よろしくね

年は、三十路。一応 まだフラット、ジャスト30って事ね

オシャレ興味なし、恋バナ興味なし、出世興味なし。

世間で言う「終わってる」気がしなくもないけど、それはそれで楽しいのよね。

好きなときに 好きなモノ作って、「猫でも飼おうかな」ぐらいな一人暮らしの独女ライフ満喫中

え？ だって思わない？

あんな、ゴテゴテと顔に色を塗って、原型とどめない位に細工してさ
結局、クレンジング剤使った末に 肌が荒れるんでしょ？ 超本末
転倒的苦笑でしょ！

だったら、朝は10分でも長く寝て、夜は30分でも早く寝たいわ。
アハハ、終わっててゴメンね

ガテンな仕事してるせいか、服のサイズには 一切困らなくて、有
難いことにダイエットとは無縁。

いいでしょ

職場にも、10年乗ってる自転車で通勤してるの。

ロードバイクって知ってる？ ツールド なんとかとか トライアスロンとかで使われるあの速い自転車ね。

片道15キロだから、自転車で45分くらいの距離をチャリ通してるんだ

朝日を浴びながら 自分が風になったり、星を眺めながら 流れる雲を楽しむ通勤ってのも、結構楽しいわよ

家に帰ってすぐのビールとかココアがおいしいし、お風呂も楽しい。

自由奔放？ 健康的？ 酒、強そう

よく言われるわ

心配しないで 期待に沿える程度の裏表の無さは持ち合わせてるから。

ま、そんなわけで よろしくね

始まりは、突然だから 「始まり」

やっと繁忙期も終わって、パートさんたちも「なんか、今更で繁忙期の疲れが出てきたわ…」とか肩をトントンしたくなってる今日この頃。

「やっと終わったね、最後まで付き合ってくれて有難う」「交代で連休とつてもいいよ」
声を掛けて歩きながら、あがってきた作業レポートに目を通す。

あ、うちのカイシャってね、機械部品を扱ってる商社なんだけどさ。私の職場は、商品を取引先から在庫として受け取って、お客さんのところへ出荷する物流センターなの。

私は、100人のパートさんたちの面倒を見るのが仕事。
車1台保有するにも、カイシャは行政と国に色々書類を出さなきゃならない。

そんな感じの事務仕事やりながら、パートさんたちの作業状況を現場でチェックしてる。
ガテンでしょ。

入社8年目

上司と2人で100人のパートさんに頼りながら物流センターを運営してきた。

残念ながら、男勝りなアタシになっちゃったけど、とりあえず毎日
は楽しい、かも？

「蕃昌サン、事務所に何か偉い人が来てました」
パートのリーダーから連絡を受けた。

「偉い人かあ… ばっくれてもいい？」

冗談は半分本気。

どこの誰かで、めんどくさい度合いが決まるんだけど、何なんだろうなあ…

嫌だなあと思いつながら、事務所向つてる最中にふと

「笑ってられるのも今のうちな嫌な話だったりして」と、呟いてみる。

悪い冗談が本当になるとも、それが未来の旦那との出会いになるとも、

そのときは、まったく予想できない展開だった。

事務所に戻ると、なぜか、パートが誰もいない。

ただの来客で、よくある用件じゃないのは、すぐに分かった。

「おう、ちよつと来いや」

上司に手招きされて、応接ソファアに座る。

アタシの上司こと通称：武藤の親父さん。物流倉庫のイロハを教えしてくれた入社配属以来の上司だ

江戸っ子っぽいカラっとした気質が好きで、なんとか辞めずにここまでこれた。

アタシは、大好きだ。

「親父っさん」

その言い方すら、場にそぐわないような空気。誰が来たんだ？

来客は、見るも見目麗しい（というのだろう）若いサラリーマンだった。スーツの社章で、同じ会社の人だと分かった。

なんだ、社内じゃん。

一瞬、気が緩んだけど、その気分もすぐに消えとんだ。

「秘書課の柏木だ。蕃昌チーフだな？」

席を立つての挨拶もせず、ものすごい目上目線で、ものすごい見上げ目線の挨拶。

ブッチーン！！ なにコイツ！！

ちゅーか、お前誰だよ？ 秘書課なんぞ、本社販管費で営業部隊に養ってもらってる部署でしょ？

現場で身体張ってるアタシ達に対する態度がソレなわけ？

一応 筋を重んじるアタシ的には、（コイツ、無理！！）返事をするのがやっとなかった。

「失礼ですが、ご用件は？」

数字ばつかりのプリントを受け取りながら、（あー早くコイツ帰らないかな）イライラのボルテージが早くも出現した

「手短に言う。」と、これまた、お約束のように冷たい言い方が切り出されて、

「経費削減の方針により、ここの物流センターの運営経費を15パーセント圧縮して欲しい。」

裁量は、現場にゆだねる。改善案は、直接、自分宛に送ってほしい。」

よく分かんない指令が落ちてきた。

てゆーか、お前誰だよ

何様だつての？

経費とか裁量とか、単語の意味が分かんなくもないけど、15パーセントって…感覚分からないよ。

ゆだねるとか、直接自分宛って、アナタそんなに偉いの？どう見ても見た目30代前半よ？

あまりの高圧的な態度ゆえに、「拒否権が無い」という事と

取り急ぎ、でかい爆弾が落ちてきたのは 頭の片隅で分かった。

でも、フツー、本社の秘書課くんだけが、本社の物流部も経由しないで行き成り「やれ」ってのも、どうなの？

今は聞けない自分をなだめつつ、「期限は？」と一応聞いてみた。「いつまでに出せる？」

いつまでって… そもそも この運営経費の15パーセントって、額にしたら福沢諭吉先生たちが運動会やって盛り上げられるぐらいの人数よ？

そんなの簡単に出せる訳が無い。

「武藤さん…？」上司の顔を伺ってみる。

「相談相手が要るなあ…」と、あまり大きい声でない返事が返ってきた。

「いきなり秘書課へ提出ってこたあ、そのまま重役に行っちゃまうんだろ？」

本社の物流部の意向もあんだらうから、すぐってのは無理だ」

上司らしい当たり障りの無い理想的な返答をしてくれて、ほっとした武藤の親父さんって人は、こうやっていつも「部下を守るのが、上司の仕事だ」背中で教えてくれる。

でもそれは、ただの時間稼ぎの効果しかないのは、お互い分かっている。

顔をあげて、めんどくさい珍客と目をあわせた。

それに気がついて、珍客が口をあける。

「本社の物流部では、話の埒が明かないので、こちらに伺った次第だ。」

なぜか、まっすぐに私を見る。

初対面のくせに、堂々と値踏みしに掛かってくるような視線。

無駄がないスッキリした顔立ちに、漆黒の髪が隙もなく固められている

ちよつとオシヤレなオールバックだけど、緩みのない鋭角的な雰囲気、ちよつと緊張させる。

でも一瞬、何かが伝わってきた気がした。

ああこの人は、本社の物流部が殿様気取りの使えないオッサンばっ

かりの集団っていうのを分かってる。

現場管理士として、私に直接話を持ちかけに来たんだ。もしかしたら、それなりに要点をわかって仕事している人なのかもしれない。

「私は現場管理士です。」

言い訳にならないよう、言葉を慎重に選ぶ。

「運営には携わっていますが、改善報告の書面となると、書きなれているとは言い切れません」

言いたくないが、ここは素直に言うしかない

「おそらく、書類の添削と相談から話が始まるでしょう」やるにはやるけど、手間はかかりませ。

「作文の赤線引きならすぐ終わる。それに、ここの経費15パーセントなら、人件費を20人工減にんぐらせば、目処めどがつく数字だ。」

今度こそ、冷静に話せる自信がなくなった一言だった。

コイツ、人の血通ちってるの？

よくそんなリストラ案を平然といえるわね!?

それが、いまの旦那との初対面だった。

試験前に掃除がしたくなる気持ち。

柏木って言う人が「見送りは結構」颯爽と帰っていった後、武藤の親父さんと二人部屋に残された。むしろ、事務所に残りたい気分だった。

いても経ってもいられないさっきのご来訪。

いきなり、物流センターの経費を15パーセント削れだなんて。

「どうします？」

いきなりすぎる。まあ、いきなり来るから、驚くんだろうけど。

「どーかするしか、ねえだろう。」

苦笑いをしながら、こちらを見返してくる。

何をどうするかの具体的な答えは、簡単に貰えそうも無くて、でも、いても経ってもいられない不安を落ち着かせたくて。

「しっかし…」

とりあえず、何でもいいから、しゃべり続けたかった。

「今の人、何なの？あの高圧的な態度！」

「そうか？俺は、ただの青二才に見えたけどな。大したことねえよ」

心配するなという口調で、宥めスカされてしまった。宥められてもなあ、アタシは気に入らないんだよねえ…人を小バカにしてきたあの態度がさあ…

「なんだよ、シケた面しねえで笑えよ」ホレ、と麦茶が差し出される。

「親父さんほど大人じゃないんですよ、どーせ」天井を仰いだ

「まあ、困ったときは、倉庫洗いからと相場が決まってる」

天井も仰ぎ飽きてそろそろ体勢を変えた時に、親父さんが呟いた

「倉庫は、ハコと物と人だ。ハコは、会社の物だから、いじらなくていい。残り二つを洗ってみるところから、話が始まるだろうな」その二つにはあ、とため息が漏れてくる。

100名のパートを抱えるこの物流センター。若干、ゆるい気質だとはいえ

「だからといって、解雇とかやりたくないよ」首を申し渡すだなんて、やりたくない。

一番安直で手っ取り早いかもしれないけど、やりたくない。

そして勿論「バカヤロウ、簡単に口に出すんじゃないねえ」勿論、上司の決済が降りるわけが無い。

「人足を大事にしてこそ、一仕事だ。」そこまで一息に話して、二人でため息が出てくる。

「ま、お前さんが苦手なゼニ勘定から始めるべ」

親父さんが、「話はここまでだ」と言いたげに席を立つ。

「倉庫に関わる全部の数字をだせや。端から端まで全部な」

「今いきなり言われても。どこが端でどこまでが端なのかも、あいまいなのに。」

「うるせえ。人と物。今はそれしか無えんだから、端も富士もあるかっての」

そこまで言うと、親父さんは、本当に部屋から出て行った。

一人残された事務所で、思い出したように外線がなり始める。

その電話に、すぐるように。アタシは、受話器に手を伸ばした。

三日後。

例のツンケンした顔のまま、あの柏木が来た。

「急に印刷したいものがある。パソコンとプリンターが借りたい」んだそうだ。

そんなの、見え透いた建前だなあと思いながら、素直に事務所へ通

した。

聞かなくても分かるわよ、進捗を見に来たんでしょ？

そして、向こうもあえて何も話しかけてこないのが、なおさら無言のプレッシャーだった。

いてもたもたらず… 私は、事務所の外に逃げ出した。

ぶっちゃけるとね、何もやってないのよ。

だって、わっかんないんだもん。

親父さんには、「倉庫に関わる全部の数字をだせ」って言われたけどさ。

簡単に言うけど、資材の費用とか、人件費とか、業者に払ってる別途の工賃とか、電気代とか、車両維持の税金とか、項目を挙げたらキリが無いわよ？

全部で何項目あるのか、数えるのも途方にくれる。そもそも、挙げきったところで、まだ挙げきってないんじゃないかという不安と隣り合わせになるだろう、手間がウザッタイ

そんなわけで、「わかんない」を理由にズルズルと逃げ回ったら、3日ぐらい過ぎてしまった。

学生時代、試験前になると無性に部屋を掃除したくなるのを覚えている。

今はそれに近い感覚。

パートのリーダーたち5人から、ひっきりなしに電話が掛かってきている… 気になってしまう。

「ヤードで、業者のドライバーが無茶を言ってきています。何とかしてください」

それぐらい自分で何とかしてくれないかなあ？と思いつつ、呼び出されたり、

「出荷計画に記載されていない商品が、大量に来てます。どう裁きますか？」

こっちが寝耳に水の仕事が飛んできたり

「梱包資材がもう足りないです。緊急発注していいですか？それとも、代替品つかっていいですか？」

判断を頼まれる連絡がきたり

「よく分かんないクレーム電話来ました。助けてください」

電話越しに、事務所の女の子が泣きそうになってる緊急連絡がきたり

「出荷リミットに間に合わないから、ヘルプを他所に頼んだんですが、断られました」

「今日の処理量が多いのに、ヘルプ依頼が来ました。キヤパ超えしてるから断りたいんですけど、ヤダって言うっていいですか？」

二部署が険悪になってるのを仲裁に行ったり。

アタシ、「今日は忙しいからまた後日」で逃げていいよね？許してくれるよね？

そんなことも数日過ごせない事を知りつつ、柏木が帰るのを一番祈ってた。

祈りが通じたのか、奴は、思いの他、さっさと帰っていったそうであーよかった、と思いつつ、逃げ切らせてくれるかなあとみんなの足音を聞きながら呆然と思ったりした。

逆ギレも たまには許して

どんなに忙しくても、大事にしていることがある。

会話の最後で「ありがとうね」「よろしくね」ということ。

一日に100人を超える人間と話していると、いつしか、相手のために「ありがとうね」「よろしくね」と笑って別れる方が、自分のためにつながる事に気がついた。

もしかしたら、相手は、「なんで自分がありがとうって言われたんだろう。」分かってないかもしれない。

でもいいの。

言い切った自分の気持ちが引き締まるから、私は、いつも必ず言うようにしている。

夕方の出荷がようやく終わった頃、鳴った電話をとりあえず出たら、電話の相手が柏木だった。

「げ。とりあえず出たのが運の尽き。」

口に出せない心の悲鳴を何とか抑えつつ、「先ほどは、お構いも出来ませんで」と勤めて軽く言う。

用件は分かっています。分かっています、やりたくない……!!

案の定「忙しい中悪かったな」そっけない、分かりやすいぐらい心が籠もってない返事が返ってくる。はいはい、どうせ建前ですよ。

「今なら空いてる時間帯なのか？」

「空いていると言えば空いていますけど……。空ける気にならないと、空かない時間帯ですね」

どっちかって言うと、暇な確率が高いけど、確実ではないっていう意味。

「これから何が残っているんだ？」

電話の向こうで、あからさまに機嫌が悪いため息が聞こえた。

「いつ出す気だ。」「さあ？」「あと2日だ。あと2日で、経過報告でいいから出せ。」

「はあ。そうは言ってもねえ」

アタシは、忙しいのだ。やりたくないという自分の気持ちを宥めることが先決で笑

つていうのは、2割冗談で、ぶっ飛ばされるかもしれないけど、ホントに勘弁してほしい。

「ふざけるな」

やっぱり明らかに、怒りはじめようとした声が聞こえて、しょうがなく此方も事情を話し始めた。

…といえば、聞こえが良い。

逆ギレに近い事情説明。もう、この際言っちゃうもんね。

「大体ね、その手の『報告書』を書いたことの無い人間を捕まえて、2〜3日で出せって言う方が無茶なんじゃないかしら？ それは、この前、申しあげましたよね？」

まあ、確かに申しあげたんだが、その時確かに「赤線引きはこちらでやる」とも言われている。

でもね、そもそもね、アタシ自身が、この手の仕事をやったことが無いのだ。

その手の書類関係があったとしても、本社の物流部が適当に代筆して出してくれた。

そんな、今までなんだから、経費関係の改善報告書なんて、書いたことが無い。

やったことは、無いものは、無い。分からんものは、分からん。言い切って何が悪い。

「それに、目上目線で物を言いに来る前に、礼儀つてものがあるでしょう？」

私は『分かんない』『やったことが無い』って相談と質問してるの

よ？

急かすなら、さっさと手伝いに来なさいよ。」

どっちが目上目線だというツツコミは、この際、無視の方向で。

それでも、語気に気をつけて、お上品に話をしているつもり！なのよ。

「お前、入社何年目だ？ 一から十まで、なんで此方がやらなきゃいけないんだ」

何を言われようが、もはや開き直ったアタシ。反論される全てが頭にくる。

こっちが、下手にでて（どこがだ）正直に話しているってのに、なんとムカつく言い方だわ。

くだいようだけど、此方だって分からないものは分からないのだ。

「現場を回すのが、私の仕事です。その辺の社会人よりも得意なこととはあるけれど、苦手なこともあるって事よ。」

心の片隅で謝った方がいい気もしたけど、ね。

ただでさえ、むかつくこの男。売り言葉に買い言葉が続いているので、謝る気もうせた。

早く電話切ってくれないかなあ。

夜の外階段は、風が冷たくて寒い。暗くて、気持ちも滅入ってくる。相手をするのも疲れてきた。

数回のやり取りのあとついに「じゃあね、呼ばれたから切るわよ。」切り上げさせてもらった。

あ。

会話の終わりに、「ありがとう」って言い忘れたわ。

ま、人間、間違っこともあるのよ。人間だもの

…ってダメかしら？

夜20時の来訪者

前回のやり取りから程なく。

しばらく音沙汰が無かったから、喜んでいたのに、奴はやっぱり連絡してきた。

「今から一時間後に行くから、予定を空ける」

ご丁寧に、「この時間だったら空いてる」というのをキッチリ覚えていたように。

しょうがない。腹をくくりますか。

あちらだって、仕事なんだろう。オイラが書類を出さないと、自分の仕事が進まないんだろう。

「分かりました。お待ちしています」

ドナドナドナ〜 ドナ〜

外は、冷え込みを感じる冷たい雨なのに。

寒そうな顔一つみせないで、相変わらず鉄火面な崩れない表情のままご登場された。

コイツ、サイボーグじゃないの？ 夜（しかも、20時）だったのに、髪の毛のセットも崩れてない、疲労の顔とかも出てない。

あー気色悪。そんなに仕事が好きなのかしら。そんなに提出期限が（実は）迫っているのかしら。

前回、電話で「じゃ、切るわよ」と一方的に言って以来、初めて会う。

黙って向かい合っても難なので、とりあえず、もう一度、言い訳をした。

削減起案書なんぞ、書いたことがない事。
対象項目すら挙げ切れず、頭が整理出来てない事

「話は分かった」

ここ、人んち（正確には、人の部署）なのにね。尊大にソファーへ身体を預けて此方を見ている。ちょっとは、慎ましくしなさいよ！他所のお宅（正確には、アタシの部署）なんだからっ！

日本人離れた背の高い身体は、ソファーが足りないらしく、若干もてあまし気味な姿勢なのが、正直、（ソファーが）可哀想な気がした。

「武藤課長からは、どんな指示が出ている？」

余ってる足を優雅に組んで、まるで自宅でくつろいでるようなお姿。手にもってる持ち込んだきた書類をみながら、隙間ついでにこつちをみる態度が、やっぱり、何様！？って思う。

「運営に関わる全部の数字を一旦出してみる、とのことですよ。」
なるほど、と言葉では言わないけれど、プリントの向こうで、気配が伝わってくる。

お前、平安貴族のお姫様だったの。顔、見えないのがなーんか癪にさわるのよね。

人んちで、家主よりもくつろがれている上に、この目上目線。分かる？アタシのこのイライラ。

「俺は、お前ほど倉庫稼業は分からない。だが、金の流れは、お前より知ってるつもりだ。」

一旦前置きをして、奴は身体を起こした。

「『経理』というのは、金の流れを分かりやすく説明した言語みたいなものだ。事業所には、帳簿に載る数字と、載せてない数字、二種類が必ず存在する。」

目上目線はまだ続く。

「違いは分かるか？」

「違い？」

「前者は、報告したほうがいい数字。後者は何だと思う？」

「なんかこの構図、部下と上司じゃない?? まあしょうがないよね、分かんないアタシが悪いんだから。」

「報告できない数字… って訳じゃないですよ？ 報告しない理由とかあるの…」

「なんだろう。答えはなんだろう。」

「試されてる帰来もうすうす感じながら、なぞかけの答えがすつごく気になる」

「ちよつと考えて、思いつきで言ったのは「料理と材料みたいなもんかなあ？」」

たとえば、ラーメンを作るとしても、スープと麺がいる。

「麵を作るにも材料がそりゃ勿論要るわけだけど、レシピには、『小麦粉』とか『水』とか大雑把なことしかかいてない。」

でも、ホントは「お店ごとに」「産の××さん宅作成」とかこだわりとか由来がある。

「あるんだろうけど、表記する必要が無いから、書かない。」

「高くても、こだわりがあれば買ってしまうのが、職人さんだろう。」

「載せきれない情報・載せ方が分からない数字。それが、「載せてない数字」の意味なのでは？」

「ラーメンという例え話に、クスッと笑われたけど、こっちは必死だ。怒りたくなつたのは、忘れて、今は、答えが気になって仕方ない。」

「ひとまず。俺の正解は『内訳』だ。お前の答えも、間違いではない」

「なるほど。だから…」

「経理課に言えば、俺でも『材料』はわかる。ただし、なぜその『材料』を選んだのかは、お前しか分からない。算出の基準から当た

「つてみるなら、少しは道が開けるか？」

武藤の親父さんの言っている意味は分かった。でも、そんなこと言ってもなあ

数字にならないものを数字にするのは、骨が折れるよ？

「今の運営に口を挟むつもりは無い。さっきも言ったが、俺は、現場に関しては、素人だ。ただ、内訳を見直して、そこに改善が可能かどうかから、考えればいい」

今までで一番ソフトな言い方をして、そして。「手を貸してやる。見てられん」ちよつとだけ、協力姿勢を見せてくれた。

「つられてチョットだけ。この俺様チーフ殿と会話してもいいかな、つて気になった。」

「…ちよつとだけ、ね？」

それとね、一瞬だけ怖い顔が緩んだのが見えたとき、「やっぱカッコいい顔してるなあ」と思ったのは、ここだけの話。

うっ、口が滑った。認めてしまった

今のなし！なし！！ なしでお願いします！！

普通、基本じゃない？

外様將軍：柏木 公は、本日此方でご公務を終える予定らしく。

「『電算』だしてみろ」

ご帰還する様子も見せず、まだ事務所に残っていた。
早く帰ってくれないかなあ？ リーダー格のパートすら寄り付きた
がらない怪訝な空気、アタシの身が持たないわよ。

「『電算』ってなに？」

何気なく聞いた一言に、アイツの顔が固まった

「知らないのか？」そんなことも、というような 小ばかにした顔
「知らない。」

「へえ、チーフで『電算』しらない奴がいるとは 驚きだな」
いちいち頭にくる言い方する奴だ。

「『電算』ってのは、うちの会社が全社で使ってる経理システムだ。
どこの部署にも『電算』が入ってるパソコンが1台は必ずある」
本当に知らないんだな、と 鼻にかけるような言い方が本当にむか
つく。

コイツ、後で車に十円傷でもつけてやろうか。

「見たことが無いなら、見せてやる」

デスクの端にある固定電話を 手繰り寄せて どこかに電話をしは
じめた。

「秘書課の柏木だ。そっちのチーフは… ああ 物流部にいる。こ
このPCに電算入れる」

今のは、本社？本社の総務課なんかの直通電話なのかな。

てゆーか よく 電話番号暗記してるね、あたしゃ 4桁ですら限
界だよ

「申請書？ は？ 各事業所には1台『電算』が入っているのが当たり前だろうか？」

「入れてないのは、システム室の怠慢だろうか？ さっさと入れろ。」

「使用者は、蕃昌チーフだ。」

「IPアドレスいどうぞ。10分以内に入れる。以上だ」

「ガチャッと一方的に切る電話。」

「アンタ、そんなんじゃないの？ 社内に敵だらけじゃないの？」

「大体、夜の20時半とかに電話してきて、さっさとインストールしろとかいう神経が、人に嫌われるわよ？」

「アタシ以外に コイツを嫌いだらう奴がいるのが分かり ちよっと」

「一安心して、柏木を見る」

「なんだ？」

「いや」

「俺は コーヒー買ってくる。」

「まるで、空けるから留守を頼むぞ、という言い方を感じて改めてやっぱり「コイツむかつく」を再認識した。」

「分かってるけど再確認してやつだ。何度も言うようですが、奴は秘書課です。ここは、物流部の社屋です。アタシの社屋です。」

「他所の子は、あっちなんです…！！」

「数分後、半分おびえたような声のシステム室から電話が掛かってきた」

「あの〜 ユーザーIDとパスワードをご連絡しに…」

「夜の八時半に、ご丁寧なこった。外線出たのが運のツキだったね」「遅くに、ごめんね、ありがとね。夜、予定とか入ってなかった？大丈夫？」丁重に謝った後、こっそり聞いてみた。

「ねえ、秘書課のチーフって いつもあんななの？」

「電話の相手は 勘弁してくださいと言わんばかりに 声が及び腰に」

なってる

「あんさ、アタシ 最近 あの男に張り付かれてるんだけど、これって『アタシって かわいそうな人』って名乗ってもいいんかしら？」

ちよつとおどけて笑ってみた。今度は、乾いた笑い声が聞こえたので、肯定と受け取ることにした。

あー やっぱそうか。

コイツは 誰にでもヤな奴なんだなあ よしよし。

自分の考えが 誰かに肯定されてもらえるのは 嬉しいもんだ。さてさて。

戻ってきた外様將軍：柏木 公は、私の分まで缶コーヒーを買ってきてくれた。

しかも、知ってか知らずか、ブラックが飲めないアタシのために？ カフェオレを。

倍加速で、ご機嫌が良くなったのは、ここだけの話。モノに釣られた単純なアタシでゴメンなさい。

「通常、俺たち本社が見てる表がこれだ。」

ぼんぼんぼん、軽いタツチなのに「画面がめまぐるしく代わり、一瞬で 細かい数字がシャッターのように表示された。

「ぜんっぜん 意味わかんない」
「だろうな」

相変わらずむかつく一言は 缶コーヒーに免じて、今は噛み付きません。

そこは寛大な処置してツカワス。

「このセンターが経費として計上してるのが この数字だ。」
「分かるか？と見る目と視線が重なる

ズサッ 眼球が凹んだ気がしたほど、衝撃を受けた。
色見本に出てくるような 鮮やかな焦げ茶の瞳が、いやに目に付く
その言い方が、むかつくはずなのに、今回は 瞳がものすごくイン
パクトあったから 一瞬 返事に詰まった
今の衝撃が 世に言う「目力」と気が付くまで 少し時間が掛かっ
てしまった

我に返ったのは、冷や水を浴びせるような いつもの一言だった。

「俺に見とれるな」

むかつく…！ 超！むかつく。悲しいことに今回は凶星なので、な
おさらむかつく。

その言い方が、発想が特に。よくまあその発想へまっすぐにたど
り着けるわね？

アンタ、どんだけ自分にうぬぼれてるのよ

どんだけ自分が イケメンだと思っ込んでるのよ

気持ち悪いわよ、そういうよくわかんない自信

缶コーヒー効果、切れましたフラグ、立ちましたかもよ

「ホント嫌な奴だけど、仕事になると真剣になるのね。」

これでも、声音は抑えて話をする。

「だから、今 固まったたのか。失礼な奴だな」

鼻で笑うような顔が、余裕染みてて やっぱり気に食わない。

「ったく、どっちが？ 私、こうみえても真面目に仕事しているの
よ、不謹慎なのはどっちなのよ？」

「表情ひとつで不謹慎とかいう奴が よっぱど 不謹慎だとももっ
がな。俺からしてみれば 質の悪い誤解だ」

ああもう！ マウスを持っていた手が、缶コーヒーに変わり、フフ

フと気取った笑い方するこの男、やつぱ 気に入らない!!

「いちいち癩に障るわね、『見とれる』以外の言い方してくれればこっちも こんなに蛇足させないわよ」

「あるのか、他に」

あー、気に入らない気に入らない。あー、気に入らない…!!

「『面食らう』とか『呆気にとられる』とか、言い方あるでしょ？ 野暮なお人ね、貴方も」

「野暮って、お前、実年齢いくつだよ？ 今さら聞かない単語だぞどーにも、苛められてる気がする。コイツ絶対Sだ。絶対、この売り言葉の買い言葉、楽しんでる。」

そしてしばらく。

「ま、受け流せないぐらいウブな女つてのが よく分かったよ」
くつくつく、と喉奥で笑われて、結局 やり込められてしまった

まあ

実は、見とれたただけだね。はい、すみません。ぺこり
わかってよ！ 素直に認める女子がどこにいるってのよ！
そこ、突っ込まないわよ！
もう、困らせないでよ！

あー、ヤダヤダ。

アタシが悪かったことになり（勿論、私が悪いんだが、謝る気は起きなかつたので 謝っていない）

『電算』の使い方は 教えてもらえた

役に立つんだか、どうなんだかなあ。

その辺は いまいち未だ分からないんだが、知っておいて損も無からう。

あのまま放置されてたら、数字の波に放り出されて、それこそ遭難必至。路頭に迷わずに済むよう、あそこまで付き合ってくれたのは、感謝してる。

こういう『ツール』を知ってる上に、いとも簡単に手配してくれる柏木の存在は、子憎たらしいが 物流センターとしてはありがたい。個人的にはむかつくが、立場としては お礼のひとつも言うべきなんだろう。

「柏木さん」

腹の中では 散々 あの白身のセロリノツポとか、勘違い野郎とか 好き勝手に言ってるけど

今の一瞬だけは 腹の中でも「柏木さん」と呼んでやることにした。「ありがとね」

どんな顔して、ありがとと言うか迷ったけど、年上のリーダークラスのパートへ 労うように、立てるように。

そして、これからも、よろしくを 込めるように。語気に、謙虚さを出来るだけ込めて 言葉を出した。

「助かりました。」一礼するのは、それだけじゃ 気持ちが伝えきれないと思ったから

そう、アタシは コイツが嫌いだけど、パートのみんなを守る立場としては

コイツを嫌いになるわけにはいかない

顔をあげた時の柏木さんは、読めない顔していたけど いい方にとることにした。

皮肉のひとつも、今回は甘んじて聞き入れるつもりだったけど、何も言わなかった

まあ、なんだ。

何とかの情けだとか 優しさだとかとして受け取ることとして。

駐車場まで（実は、初めて！！）見送ったとき、ふと言われた。

「お前、あんまり目を合わせて話すなよ」

ん？ さっきの事？と無言で尋ねる私自身がもう目を合わせてる

「何ですか？ 大事な会話って、目をあわさないと言葉以上の気持ちって、伝わらないじゃない？」

事実、アタシ自身が、自分と目をあわさないパートを信用してない。毎朝の全体朝礼でも、目を合わせ返してくる人が誰で、視線をそらしたり泳がせた人が誰で、は 把握するようにしている。

絶対に、何か抱えてると思うから。私と向き合えない事情が何か：自信が無い、やる気が無い、違うことを考えている、今の朝礼で疑問が残っている…理由が絶対あるはず

視線をずらしたのは、柏木さんのほうだった

「まあいい。」

またくる、と言って それこそ、それっきりで帰っていった。

変な奴。

思わず、口に出してしまったか、おぼつかないけど、帰っていったのを見届けたかのように物陰から、パートたちが「帰った…んですよね」と出てきた。

みんな私の目をみている。

うん、フツー 会話の基本は、目をあわせるわよね？

まあなんだ、本社の男つてのはモニターに出る数字としか、目を合わせないのかしら。

うん、やっぱり変な奴。

みんなで101人。

あの皮むきゴボウが教えてくれた「電算」は、面白い数字をどんどん出してくれた

たとえば、パートたちに支払った賃金。

月ごとに並べて、若干の変動に気が付いた。

同じ労働時間でも 支払い賃金が違う。総務部に聞いたら「労働時間は、厳密には『実労働時間』といってですね…」

法律で決められた方程式で、「残業単価」という時給の値上げ単価が存在するんだそうだ

物流センター配属になって 7年近く。

パートの労務管理を始めたのは ここ半年だったとはいえ、まったく知らなかった

本社に言われるまま 健康診断を受けさせたパートたちの基準も教えてもらった。

社会保険、雇用保険、雇用するだけでもお金が掛かる「人件費」の実態。

知れば知るほど、面白い。

自分の頭の中に、今まで知らなかった「法律界の基準」価値観が組みあがっていく。

この過程が やめられないほど楽しくて、本屋で専門書を探しながら、わくわくする自分がある。

新しい分野に手を広げるのは、いつになっても 面白い。

そして、ここで覚えたことが この物流センターを救う手になるとは。

この時は まったく予想しなかった

「人をフルタイムで雇用するにあたり、会社が負担する金額は、支払う給与のざっと20パーセント増し」

この物流センターでは 大体こんな数字が出来上がるらしい。

フルタイムで働かせて 残業させなければともかく、フルタイム稼働者は、少ないほど運営経費が下がる。

そして、初めて知った残業単価の割合い。法定外残業の単価は25% 深夜になれば50%、週6日勤務させれば、25%、7勤務させれば50%。

ざっくり言うと、そうらしい。

定時でみんなをさっさと帰した方が、人件費は掛からない。

「全員と面談したらどうだ？」

武藤のおやつさんが 履歴書を見ながらいう。

「稼ぎたい奴、稼ぎたい金額が決まってる奴、都合に合わせて働きたい奴」

採用面接ん時から みんな状況変わってるだろ」

100人。一人30分として。一日面談に使える時間は 3時間として。

一ヶ月掛かっちゃう。

待て待て、じゃあ 15分に削る？ いっそのこと、面接デーでも作る？

うめきながら天井を仰ぐ顔に、武藤の親父さんが言う。

「つまんねーツラしてんな。お前、一人で100人抱える気か？」
椅子を寄せてきた 親父に一瞬、一瞬身構える。大体 説教（しかも長いんだ）が始まるから。
でも、今回の説教は 毛並みが違っていた。

かいつまむと、「一人で抱えるな」という話だった。

聞きながら アタシは 半信半疑つつも、大泣きしたい気分だった。

「百戦錬磨の面倒くさいババアどもだ

お前がリストラ指令受けて 閻魔帳片手に ウロウロしてるんな
ざ、全員 以心伝心で分かってたんだよ」

いつまで シケたツラしてるんだ。

「大将、しつかりしろ」

いつもの叱咤かと思いきや

「お前を信じてるんだから、お前が あいつらを信じてやれ」
意外な言葉だった。

「少なくとも、お前がフルタイムで仕事をさせてる主力連中は、みんな お前の事が好きだ」

自覚あるだろう、お前がどんなに 連中に頼ってるか。

「手前えがキツイんだから、連中に 助けてもらえ」

上司が部下に助けてという。そんなこと恥ずかしくていえない。

無言の抵抗に、親父さんは続けた

「若い衆は 若い衆なりに アイディアがあるかもしれねえ

それにな、お前さんが悩んでいるのを 黙って察しながら働いてる
どう口火を切っていいかわかんない。そんな風に考えたことはね
えのか？」

みんなに 助けてと 自分の今をありのままに曝け出す
これほど勇気があることが、入社史上あったかしら

相手は、パートだ

一方自分は、人事権をもってる責任者。

そんな彼らに そんな面をさらしていいのか

出来ないよ… 体の心が萎んでいくのと一緒に、視界も萎んでいく

そんなアタシが 口から付いて出た言葉は「夜風浴びてきます」だった。

分かってる。痛いほど分かってる。やるしかない。カッコ悪くたって やるしかない。

ガチでぶつかって付き合ってきた100人だ。分かってくれなかったら それはそれで仕方ない。

どこかで フォークリフトが動く音がする。

この音を みんなで聞き続けるために、私が変わるしかない。

夜風の名残が分かるほど 体温が変わった身体で、もう一度事務所に戻った。

まずは、各リーダーたちを集めて 話をしよう。

「弱気になってごめん」と。「みんなで乗り切りたいから、助けてくれ」と。

みんなで101人。(後書き)

残業単価の話を書きましたが、あくまでザックリ書いています。

詳しくは、労働基準法で定められており、週6日や週7日連続勤務の概念は、所属の会社によって別途定められていることがほとんど
(これは「36協定」と呼ばれています)です。

あくまでザックリなので、詳しくは、自分で勉強してね汗汗

何度目かの長い夜

各セクションのリーダーといっても5人だ。

正直 言葉遣いに悩むクセモノ揃いだけど、彼らは パートの立場にもかかわらず いつも気持ちを入れて仕事をしてくれる彼らがいつも大好きだった

経費の15パーセントを削減しろ、と言われてる。

人を削らなければいけないけど、かといって、誰もクビにしたい。い。

案があれば、仲間として助けてほしい。

「リストラしたくねえったってよ」

下手な言葉を並べなくても、彼らは わかっていた。どうにもならない現状を。

「蕃昌サンは やるしかないんだろ？」

もう、見栄も体裁も繕う気にも起きなかった。

うなだれて返事をする

あれだけ 柏木がしょっちゅう顔を出していたんだ。リーダークラスなら 察するだろう

「助けてくれて言っても、俺たちは 何をすればいいんだ？ 蕃昌サンが分かってなきゃ、なんも出来ねえよ」

もつとも過ぎる事をいう。

ないて部屋から出て行きたいくらい、自分の不甲斐なさが嫌。

でも、会話の流れに光を見つけたくて、一言しゃべろうと思った

「今の体制で、なんか 思うこと無い？ ヒントだけでも今は ほ

しいの」

しばらくは静かだったけど、一人が堰を切ったように話始めた。どちらかというと、日々の愚痴に近い。

一人が愚痴を言えば、みな とめられない愚痴を言う。

「なんで、 なの？」 が大丈夫なのに、××が駄目なのは納得がいけない」

どこまで私が 彼らと寄り添って背負って解決させれば良いのか分からないけど。

出てきた話題は、みな 私には刺さる会話ばかりだった。

一つ一つを 受け止めるたびに、全身に滝のような冷水が流れるような錯覚に陥る

でも、ひとつだけ 思ったことがある。

愚痴が出るということは、その仕事に 少しでも愛着があるということ。

本当につらくて嫌だったら、リーダーなんかにならない。

労働者でも パートと社員 心意気に隔たりはないんだあつて

仕事は仕事。 なんだかんだで みんな、 ここの物流センターが好きで愛着を持っていてくれるんだあつて

それが、 なんだか嬉しくて これが最後の支えになりそうな気がした

夜も21時を回ろうとした事務所で。 そろそろ帰りたいなとみんなが思ったとき。

一人がポツリと言った

「元はといえば、 蕃昌サンが 俺らとあんま話をしないのが悪いんじゃない」

ザクッと刺さる一言が 今夜一番痛い。

確かに、アタシは 自分の価値観で手一杯で、彼らとひざをつきあわせて話をしなかった。

今日話すのも 彼らからしてみれば「なにが今更」だ。

「ありがとう、ごめんね」

今夜の事は、簡単に気を許してもらえないとは思っただけ。
取り急ぎ謝った

数人がやっぱりだけど「やるしかないんでしょ」そっけなく言う
そう。そうなんだけどね、ごめんね。

ちよつとだけ、視界が緩みそうになって、鼻水がタレそうになって。
視線をそらしたり、ごまかしてたけど、アタシの気持ちが一段落
するまで、彼らは残っていてくれた。

明日から、一緒にみんなで考えよう。

リーダー5人を集めて話した翌朝以降。

彼らと別に 何か目新しいことは起きなかった。

ただし、ぼつぼつと 確実に 踏み込んだ話が出来るようになって
きた。

「旦那の扶養の範囲内で 年収収めたいからって

年末になるとバタバタ休みたがるババアたち、なんとかならない
？ 繁忙期と重なるのに迷惑。」

「蕃昌サンが 経費を気にするのは分かったけどさ。

ウチの部署の子が一人、どうしても 自立したいみたいだから、
なんか 考えてやってくれねえ？」

「都合よくシフト組やがるジジイと、ジジイの埋め合わせで苦勞し

てるオバちゃんいるんだけど
待遇考えてあげられない？」

喫煙所へ行くと タバコは吸わない私に付き合っ
て、大体 火を消
してくれた

入出荷の業務管理以上に、彼らとすごす時間が増えた。
業務はどんどん溜まったけど、この際 割り切った。

彼らとのやり取りを残したノートは、どんどん 薄汚れていったけ
ど、

これからの希望で埋まっていくような気がして、気にしなかった。

ころあいを見計らって サブリーダー格と重鎮組へ出向こうとした
ら、向こうが話し始めてきた。

リーダーたちは やっぱり リーダーだった。重鎮組は、彼らと違
い、勤続年数に任せて 手に負えない自分勝手なわがままを とう
とうと言う人もいる。

でも、「わがまま」と判断した瞬間、毎回本気で突っぱねた
この場の全員と喧嘩になってもいい。

私は、真摯に助けしてくれるリーダー格5人を裏切りたくない。

支えてくれ むしろ逆に育ててくれたような彼ら5人に、不誠実な
ことは言いたくない…

いつしかそれが信念になり、突っぱねる言葉に 優しさと愛情？が
籠もるようになった

説得交渉するにも、リーダーたちが一緒になって助けてくれたから、
そんなにつらくなかった。

充実、といえるほど甘い毎日だったわけじゃない

休みの前夜は 毎回 仕事の夢を見た。

見たくない悪夢もみた、これが夢じゃなければいいのに という甘い夢も見た。

倉庫の屋上で 月を眺めながら 泣いたこともある

それでも、どうすればいいか。

薄汚れたノートを見返すうちに分かってきた。

後は、これが 数字上でも目標値へ行くか 書き落とせばいい。不思議と何とかなる気がした。

だめなら、また みんなに相談すればいい…

通常のシフトで、25人工削る。事実上の25名リストラ案には替わらなかつたけど。

何とか、100人の不満が出ない程度に 收拾をつけることが出来た。

ソレは勿論、紆余曲折もなく、平々凡々と 各セクションで日々25人工分の削減が出来たわけじゃない。

余計な残業代を払わなくて済むよう、戦力をみながらシフトを組んだり

向き不向きを理解したうえで、部署異動をさせたり。

小ざかしい計算の中で、実は感謝もされた。

年配のパートたちを 雇用保険へ入れたことだった。

雇用見込み31日以上で週20時間の労働が見込める場合は、雇用保険への加入が義務付けられる。

万が一の退職時には、期間次第では失業給付が受けられる。

掛け金が ものすごく低いことに加え、遡って掛け金を積むことも

出来る。

「お払い箱になったとき、3ヶ月だけでも収入があるってのは嬉しいわ」「アルバイトみたいなもんだから、諦めていたんだけどね。」
そして、何人からか言われた。

「もう謝らないで。蕃昌サンがいる限り、頑張れるから」

100人の思いの積み重ねで この物流センターは回ってる。
実感が沸いたとき、母屋いっぱい広がる感傷で、一日だけ 声を
出して泣いた。

明日、正式に、みんなの前で朝礼をする。

「これからも 助けてください」と

アタシは、責任者で管理者だけど、女王様じゃない。でも、多分みんなから大事にしてもらってる自信はある。
幸せなことじゃないか。

ジジイの節介（前書き）

真知子の上司：武藤の親父さん
視点のスピンオフ
ショートスト
ーリー

ジジイの節介

夏の夕方も見えてきた15時ごろ。
珍しく静かな午後だった。

殺風景な事務所には いささか不釣り合いと写る長身の男が 礼儀正しくドアをノックした。

「おう、よくきたな。本社の若旦那さんよ」
実年齢よりも かくしゃくとした身のこなしで、初老の男が出迎える。

よく仕立てられたスーツに身を包む来客を相手にしても、男は少しも臆することなく 席を促す。

よく馴染んだ作業服に、年季の入った手ぬぐいを手にしていてもだ。

「お嬢に用かい？」

「つたく、一言だけかい
相変わらず挨拶しかできねえ旦那だな
へらへらしてねえだけ、可愛いがな。」

「さあて どうすっかな。ウチの姫さんなら昼寝だ、どうするさね？」

「急ぎかい？」

「いや、と短く答える柏木

「近くまできたので、寄っただけです。中を見せていただければ」
可愛げがねえなあ。会いに来たんだろ、ウチのお嬢に。」

「勝手に見て歩いていいぜ。」って言っても、いきなり倉庫に放す
のも ちよいと酷か

棺桶が見えてきたジジイの目は、誤魔化せないぜ。
素直に、お嬢に構ってほしいって言えばいいのにな
ス力引いたツラが、分かりやすくていいねえ

まあいいや

ジジイは 手前らが見ててらんないんでな
ちよいと 手を出させてもらいやっせ

野暮とかいいなさんなよ、膳立てってやつだ

「若旦那さんよ、お嬢は 今頃 3階の中二階だ。」

この若旦那のことだから

年頃の娘が あられもないカツコで 昼寝してるなんざ 考えちゃ
いないんだろうな

嫁入り前の娘がと思うと、不憫でならねえが お前が出てきたって
のは、これで縁付いてくれればと 俺は思っただわさ

あの子は良い子だぞ

ちいとじゃじゃ馬だけどな、性根は大事なトコのまん真ん中を突い
てくる

親号本社を毛嫌いしてたうちのお嬢だけどな、お前さんが気にか
けてくれるつても 合縁奇縁つてもんだな

そこいらの赤鯉よか、確かに お話が通じそつだ。

さあ、ジジイの節介に お前さんならどうする？

まあせいぜい この老いぼれを楽にさしてくれや
男だったら ビシッと決めてくるもんだぞ

男は、あの後、彼らがどうしたのかは、知らない。

知る気も無かったが、それから一年後に「結婚します」と伝えてきた時は、

少しならずも、あの時に求めたのか、思い出しはした。

それとも、あれがきっかけで、進んだのか。

いずれにしても、求めたものを、受け入れた結果なのだろう。

「ま、幸せうちゅうのは、いいもんだ」

オバちゃんたちは 見た！（前書き）

またまた スピンオフ。

柏木×蕃昌 をめぐる二人のビミョーな間柄を 100人のパート

たち（の一部）が 楽しそうに観察しています
読み飛ばして頂いても、支障ありません

オバちゃんたちは 見た！

この物流センターは、だいたい10時ぐらいになると15分程度の休憩が入る

各階フロアの喫煙者たちが、おのおのの紫煙を燻らせ、一服を楽しむのだが…

今日のタバコ部屋は、一味会話が違っていた。

「みた！？ 蕃昌さんがドレスアップしてた！！」

駆け込んできた一人が言う。

「みたみた！」 「なんか、今日あるの！？」 「またあの偉い人、くんの？」

うわさの陰には、女性たちの高らかな笑い声あり。

名前が挙がった人物は、彼女たちの雇用者…責任者である。

自分たちの娘たち程の年頃というのも手伝い、目下何かと世話を焼きたくなる存在だ。朝は早くから、夜は遅くまで。文句も言わずに、楽しそうに働き、気持ちよさそうに笑う彼女が、みな好きだった。

これだけのいい子なのにも関わらず、スタイルだっていい。健康的な肌に、色で荒らしていない生き生きとした髪。その分、化粧はおろか、着飾るの一つもない。しいて言うなら、眉を整えている程度か。

そんな彼女が、ドレスアップ…といっても、作業着でなく、スーツ姿で事務所にいることをいつしか「ドレスアップ」と呼ぶようになった。

滅多にない「ドレスアップ」

大概、先々に決まっていた来客の到着や彼女自身の外出がほとんど

だ。

「ウエストがキュッてなって お尻もぷりっと……」全員がため息を吐く。

自分が娘だった頃を美化しても、あんなにスタイルが良かっただろうか。

でも、一つだけいえることがある。

「あのぐらいの歳には、結婚していたわよね」「2番目が生まれた歳かな」

思い思いの自叙伝を振り返れば、恋愛など、とっくに卒業している。今の時勢でいう「勝ち組」であり、自分たちの職場の娘は「負け組」という構図が出来上がる。

「お嫁、行かないのかしら?」「せつかくの美人なんだから、毎日ああでもないのに。」

職場の七不思議には、早い順序で登場できるであろう事実である。

「じゃあ。また、本社の素敵なお客、くるのかしら」

この頃、本社の社員が頻繁に来所してくる。乗り付ける車の格といい、着こなしているスーツの質といい。会社案内に名を連ねる重役……にしては若すぎる……ではないにしろ、側近かもしくは、候補者なのだろう。見るからに、名のある御曹司のように見える。

立ち振る舞いのスマートさといい、隙のない立ち姿といい。ブルーカラー揃いの物流センターには、非常に際立って目立つ来客だった。……が、持って生まれたものなのか。冷ややかな顔立ちが纏う雰囲気故に、だれも、近づけないでいる。現に、雰囲気通りの冷徹な指示を秘めて、この頃頻繁に来所しているらしいとの、噂だけが先行している。

「あの二人、どうなんだろうね。」

明らかに、あの男を避けている我らが娘。「出さなきゃいけない提

出物があつてさ〜」出来れば、話したくないらしい。常に、逃げ回っている。それは、周知の事実だ。ただ。

「来ても空振りが毎回じゃあねえ…」

どこことなく、男が寂しそうに帰っていく姿を全員が一度は見ているため、もしかしたら？と我らが娘の縁談に迄、なつてくれないかと気がかりなのだ。

ふと一人が思い出す。

「あ、来るって言つてたわ」ホント？そうなんだ〜 と一斉に黄色い声上がる。

言うまでもなく『もしかして、二人とも実は気があつて、実は照れてるだけ』という、願望めいたお目出度い観測論なのだ。

…が、それもまた長く続かず。また別な声が「蕃昌さん、陸運局行つて、そのまま労働基準監督署へ行くつて行つてたわよ」都合の悪い真実が浮上し、歓声は一気にしぼんでしまった。

歓声の静まりとともに、感情も鎮まったのか。各々が休憩の終了を悟り、一斉に彼女たちは 持ち場へ帰つていった。

残されたのは、彼女たちより後に休憩を取つた各リーダーたち。

「へー」

女性たちの噂は、話半分で聞いているが、残り半分はたまに信じていたりする。

「…ちつ！ ざんねーん」一人が、言葉とは裏腹に、思い当たる何かがあるのか、ほくそ笑んでいる。

「なんだよ、楽しそうだな」残りの4人が失笑した。

「フフフフ、ま〜ね〜」

気色悪い笑い方だとは思いつつも、手にしている煙草が残りわずかになった辺りで、彼らもまた、各々の持ち場へ帰つていった。

とあるフロア、噂の男が、その上司とともに現れた。

「おつかれさまでーす」

一人の男が、噂の男を出迎える。

「僕、このフロアのリーダーやってます」人のよさそうな笑い方をしながら、同時にその脳裏で、先ほど口にしなかった、したり笑いの中身を思い出す。

そして、一言。隣のパートへおもむろに指示を出した。

「あ、さっきの件、蕃昌サンへ直接確認してくれる？」

目の前の男が、一瞬身構える。

（予想通りですねえ） あー面白い）

「うんうん、直接来てもらって目視で確認してもらってよ。僕の

決済じゃGO出せないからさ」

（さすがに、2回目は立て直しちゃいましたか。じゃあ…）

「そういえば、1階にいたかも。急用って言ってたから、今すぐ行かないと会えないかもよ？」

（フッフ、慌てるんですね！ そのため息、誤魔化せてませんか
ら）

彼の娯楽は、今日も順調に満喫できていた。

ただし、万物全てにいえることだが、「名残惜しいところで止めるのが、一番の至高といえる。

（今日は、この辺で止めておきますか）

作っていた表情への緊張を一層強めながら、彼は言った

「僕、次の作業分のピッキングリスト取りに離れるんですけど、いいですか？」

彼の信条は、「仕事は 速く楽しく美しく！」そして、人には言わないが「逃げ足は速く！」であった…

ふう…

噂の男が、トラックヤードに立ち上る灼熱の陽炎を見ながら、何度目かのため息を吐いた。

その視界のさきには、男の用件本来といえる人物が、ケータイ片手にやりとりをしている。その風景を、数人のパートが物陰から見ていた。

「蕃昌サンも逃げ回ってますね」

「本社の重役来所の予定が入った瞬間、今日の午後の予定を組みましたからね」

「いくらなんでも、夕方までには帰ってきてくれるよね？」

「偉い人たち帰った途端、帰ってくるんじゃないですか？」

「…その場合、むしろ、出かけない気がするけど。」

全員の視線に気付くこともなく、彼女は駐車を堂々と闊歩しながら、ケータイで会話をしている。時折浮かぶ笑顔が、明るい話題なのだと思われる。

一陣の風が吹き、歩きながら揺れていた長い髪が、また一段と高く揺れた…

「おーい、柏木君。」

噂の男が、上司に呼ばれ振り返った。そして、「只今、そちらへ向かいます」短い一言ともに、その場を後にしていった

表情は分からなかったが、どこか寂しそうで、そして嬉しそうだっと思ったのは、その場の背中が語っていた

「柏木さん、呼び戻されちゃいましたね。ターゲットとのコンタクト、失敗！」

「あーあ。蕃昌サン、出掛けちゃうんだ。無駄足になるね。」

「いやいや、作戦はまだ失敗と決まったわけではないよ。…最後の最後、駐車場で捕まるってこともありえるよ。」

「じゃあ、蕃昌サン、逃げ切れるのかっ！！よし、勝負！！！」

今日も、物流センターは 嬉々として活気に包まれていた。

大団円？

やっぱり無我夢中で 周りが見えてないのは 私の悪い癖らしい。
武藤の親父さんが、サラッと イチモツ発言してきた。

「俺、ちっと一発 勝負すつからよ

お前、見てろよ」

私がパート達と真剣勝負の25人工削減面談をしていた裏で、浮いた25人工分の事を 親父さんは考えていたらしい。

「困った時は、倉庫を見直せ」

親父さんは 自分の格言通り 倉庫を改めて見直して 丸々一日使
つて レイアウト変更をした

「お前なあ 回転率が低いものが なんでこんな真ん真ん中にある
んだよ」

入荷して出荷するまでのサイクルが高いもの、低いものへ順位をつ
けて 並べなおしをした結果、

「倉庫の一割が ものけの空になったぜ」

正直、ゆとりなくキチキチになったこの倉庫。

空かせた部分で 何をするといいのか。

答えは数日後に回った社内メールで分かった。

「倉庫空いています」

突拍子もないタイトルで、全社へ回ったメール。

25人工浮いている上に、場所も空いている。

活用できる方法があれば 教えてください。

唐突が無さ過ぎるメールだったが、
上層部には この素っ気の無さが響いたらしい。

総務課が 資産価値の計測にきて、外部へ（といっても 社長とか
重役のコネがある企業）貸したら
いくら収入になるか とか
営業部のトップが数名 来客をつれて 新規代理店の交渉をはじめ
ようかと言って来た

「倉庫と人工があまってるや 足りねえのは 荷主だけだ。全部と
上手いことやるのが 倉庫マンの仕事なんだよ」
勿論、裏で柏木さんが 社内のおちこち方面で根回ししてくれたら
しいんだけど。

わさわさと また慌しくなったこの頃、武藤さんが意地悪く言う
「お前よあ、荷主そろったら どうすんだあ？」

「こんだけ 俺が他所から引っ張ってきて、出来ませんんざ 言
わせねえからな」

嬉しくて 面白くて たまらなくて 思わずにやける

「たかだか たったのあの坪数でしょ？25人もいれば 2セクシ
ョン組めますよ。」

「いくらでも 現場回しますよ」

大丈夫。

物流センターは 余裕を持って 生き残れる。

あと一押し。

後一押しでそれが確定する。
みんなで頑張ろう。

まだ終わらないわよ！

振り返ってみれば、むしろ楽しかった。
達成できたから、いえるんだらうけど。

改めて、みんなに お礼を込めて 熱がこもった朝礼をやった。

「皆さんのお陰で 物流センターは 運営が出来ています」
本当にありがとうございます。

助けてくださいといえる素直な間柄

ありがとうございますという素朴な間柄

柏木の青筋大根ヤローのお陰で、苦勞したけど、振り返ってみれば

いろんなことが確かめられた

それはそれで。

振り返ってみれば、むしろ楽しかった。

でもって、数日後

今日は、重役に呼ばれて 報告 兼 慰勞の食事会、やってもらいました……！！

本当なら 最後の一勝負を決めてくれた武藤の親父さんが行くべき
だけど、

「馬鹿野郎、俺は お上と泥棒は 大嫌いなんだ」断ったので 代
理で私が行くことになった。

明日、いよいよ 相手側の商品が 初めて入ってくるのになあ……っ
たく 偉い人って全てが他人事なんだら。

ま、でも 料理は 美味しかったからいいや。

「蕃昌、送っていく」

珍しく重役連中が足取りもしっかりとタクシーで帰っていったから、らしい

店先に二人残され、二人で 夏の夜風を浴びる

さすがに 調子に乗って飲みすぎた。夜風が気持ちいい

代行運転の業者の電話番号、聞いてくる。と 青白のつばのセロリ君（柏木のことね）は 店に戻っていった。

今日は、月が綺麗だ。風もあって、いい夜だね

そんなこととかで 理由をこさえては 飲もうとする武藤の親父さん

馬鹿野郎、大人の楽しい酒ってのは そういうもんなんだ

昔 言っていたなあ、なーんて 思い出してふと。

MRセロリが未だに帰ってこないことに気が付いた

アンタさあ 代行ぐらいチャッチャと調べなさいよ、と勢いよくドアを開けたら

「いらつしゃいませ」の声が聞こえるよりも早く気が付いたのは…

視界の先で 壁にもたれる男の横顔だった。

「蕃、わるい」え？何 なに？ あ、あーっ！！

上品なBGMの中 どさくさに聞こえた ぼたぼたと流れ落ちる水音。

…はきやがった…

人の慰労会なのに。

「送ってもらう」が「送ってあげる」に変わったのは 言うまでもない

そして、この日の夜、とんでもないどんでん返しがあったのも、また別なお話。

良い子はさっさと帰りましょう。

枕元で、ガンガンとケータイが鳴ってる。

今何時？ 目覚ましの音じゃないんだけど、これ。

ちゅーか、まだ夜中じゃね？ 誰じゃい？

手元のケータイを手繰り寄せ、止めようとしたら「ん？鳴ってない？」

…ちゅーか… どこ、どこ？

昨日の記憶を手繰り寄せる。

確かにアタシは、酒を飲みまくった。

そして、柏木も飲みまくったのか、アイツは吐いた。

で、家まで送ってやってから…記憶が無い。いや、ある。

家まで送って、奴をベッドに押し込んで… アタシが、その場でへたって寝ちゃったのか。

最後の記憶は…じつは、トイレ。

「明日、入出荷何があるんだっけ？一便、何時にくるんだっけ？」

思い出しているうちに寝ちゃったんだ…

で、今、自分はお布団の中ってことは？

「(ひいひいひい)」

本当にびっくりすると、人間 声も出ないらしい

隣には、熟睡中 メンズ：柏木竜一(34)

ちよつと待ったあ！

服は着てる！私も着てる！ 昨日は何も無い！

みんな、お願いだから信じて！ 何も無い！うち等の間には何も無

い！

記憶は無いけど、何も無いはず！このまま帰れば、何も無いまま帰れる！

…よし！

動き始めてハツとした。そもそも、トイレで寝たっことは、パンツ下ろしてたって事よね。見られた?!? マジ? ちょっと待ってよ。パンツとかスカートとかちゃんと履いてる。もしか、履かせてもらった!?

ガン

ますます、こっそり帰るしかない!!

意を決してベッドから出ようとしたとき。

「待てよ。時間になったら、送ってやるから」
手首を掴まれた

「まだ夜中だろ? 今はよく寝て、シャワー浴びてから行くといい寝てたはずの柏木がとろんとした顔で此方をみてる。

「大丈夫だ、なにも無かったから」

昨日はありがとう。かすれた声だったけど、それはもう、悩殺ポスターのような顔で微笑まれる。

「あの…」

トイレで爆睡の事実を聞きたいんだけど、怖くて聞けない。

「あまりに忍びなくてね、運ばせてもらった。」

身体を起こして、そりゃもう 手慣れていますって仕草で ベッドに引き戻される。

「今、夜中だろ?こんな時間に帰すのも、心苦しい。」

あのー アタシ誘われてます? それって、いろんな意味で貞操の危機!!!

「そんな、怖い顔するなよ。男だって、女の人を家に上げるのは緊

張するんだよ。

下手に、後で面白おかしく噂話にされても困るし。

むしろ、こんな夜中に『じゃあありがとう』で帰して何かあったら、それこそ。」

まあ…：そうよね

「話が早い奴で助かるよ。」

弱ってる男のは、こんなに色っぽく見えるもんなんだろうか？

それとも、これは、母性なんだろうか

「身体、大丈夫なの？」

「お陰さまで。昨日は、ありがとう」

起き上がった柏木は、Tシャツ短パン姿。

「あの後、何回か、風呂で吐いたんだけど、水を飲んで落ち着いてきたよ。」

声がかすれているのは、胃液なのか…：それとも寝起きの色気3倍増し？

ふと、思うままに口から言葉が出た。

「ねえ、普段、どれだけ尖がって生きてるの？ 大して飲んでないのに吐くなんて。」

くすくす笑う声が聞こえる。「それは、お互い様だろ？」

片方は、吐いてうずくまって、片方はトイレで眠りこけた間柄。なんだか、取り繕うのも馬鹿らしくて、お互い笑ってしまった。

「あんだだけ仕事できるのに、横暴な傍若無人ぶりで周りを振り回して。何が得なの？」

重役秘書って、そんなに心労溜まるの？」

初めて、なんのスタイリング剤もつけてない顔を見た。

オールバックっぽい隙の無い髪形じゃない…：プライベートな顔は、ウチのセンターにも一人はいそうなフツウの男の子だった。

「上司連中が、同じく横暴で傍若無人なんだね。つついそれが染

み込んできた。毎日、4人とか5人とかのVIP要求の我俣を一日中聞き続けてみるよ、気が狂うぜ？」

自嘲気味に笑った顔が、真実味を添える。

「まあ、秘書課のチーフ汲んだり、なんで物流部のコスト削減を手伝いに来るんだよ、って思ったくらいだからね」というのは、アタシの感想。

「君、やっとして〜で投げられたんでしょ？」

「さすが、察してくれたか。初対面の頃から、頭のいい子だなとは、思った。」

「てるぜ。もつと、褒めてくれても良くってよ。でも。」

頭の良い『子』、『子』ってなによ。嬉しいけど、素直によるこべないんですけど。

「だいたいさ、そんな素振り、全然なかったよね。超俺様キャラで、散々ハナで笑われた気がする。」

「俺にとつては、あそこはアウェイだからな。気は張ってたよ。」

確かに、完全無欠な存在っぽいキャラで、いつも接してた。

「気付かなかつただろ？ 本当は……」

その先の声が掠れて聞こえなかった。

「え、なに？ もう一回」

目の前の男の顔が、真っ赤になった。

「二度も言わせるな」

「は？ 聞き取れなかつただけだつてば。」

「センター行くのが、いつも楽しみだったよ。蕃昌サンに会いたかつたからね」

か、からかわないですよ。慣れてないからこつちの顔も赤くなる。

その顔でこつち見ないで。アンタ、自分の顔がいくらイケメン面だからって乱用しすぎ！！

それを存分にご活用しながら、重ねて口説きに掛かってくる

「目を合わせないで話すのが、大変だった。」

「ちょよ、ちょっとまってー アタシが恥ずかしくて逃げ出したいんですけどー」

「甘い顔ってよりも、野生的な強い顔してこっち見ないでー 美男なのは分かった。分かったから見ないでー」

「自分が勘違いしそうでね。目がまっすぐに綺麗だからさ、視線が合うたびに、ずらしたよ。だから、いつだったかの駐車場で言ったのは、ジャブ。本気になりそうで怖かった。」

「そして、また、反則のニヤリ笑いで「まだ提出してもらってないのにな」

「ちょっと待ったあ！ ハッキリさせようじゃないの」

「あのー、口説いてます？」

「口説いてるよ。」キツパリ。すがすがしいまでに男らしく！…！…
「っておい！」

「だって、今日逃したら、接点が、どんどん減るだろ。口説くなら今日しかない。」

「逃がさないからな、というギリリとした声。低くて響くから、なおさら怖いつてば。」

「送り狼ならぬ、送られ狼ですか」時代は、進化してますのう、一歩進んだ新しい作戦かい

「お前、はぐらかすなよ。それに、俺がそのまま襲ったら、セクハラで俺負ける。」

「じゃあ、襲って欲しいってこと？」このまま色気に腰砕けそう。

「少しでも、小生意気なことを何とかやり過ぎそうといてるんだけど、いかんせん 実戦経験がさびしいんで（自分で言ってる切ないよ）簡単に追い詰められていく。」

「やれるもんなら、襲ってみるよ。」ニヤッと笑いながら挑戦的に、手招きしてる。

「それ、抵抗する気あるの？」『誘ってる』の間違いじゃなくて？」

「お前、同意の意思があるなら、押し倒すぞ？」

もうちょっと、色気のある会話がしたかったけどな。お互い照れ屋じゃ無理か。

そんな声が聞こえた気がした片隅で。

気がついたら腕の中で、気がついたら、キスされてた。

「俺は意外に一途だよ。」

びっくりするぐらい、早い鼓動。…アタシじゃなくてね。背中に回ってる手が、分かりやすいぐらい汗ばんでる。なんだか、こっちが緊張するっての。

「手慣れてる男だったら、このまま踏み切るんだろうな」

誘うようなキス。いや、「ような」じゃ無いだろ、誘ってるだろ！

「アンタねえ…！」

うろうろ… 美形で上手くて、へんなトコでウブっぽくて。理性が解けるっちゅうねん。

「逃げない、ならそれでいい」

…で、その後の話？

書けるわけ無いでしょ！ 事実上の朝帰りになったわよっ！！きゃー

ちなみに、後日 旦那の話では、「あの夜は、本当に緊張した」んだそう。

一途なのは、本当でした。とだけ書いとくわ。

今度こそ、大団円

アンタみたいにヒネくれてたら、よその部署に友達もいないでしょ？
いいわ、友達になってあげる

初めて真知子（今は嫁ね）を抱いた時の返事がそれだった。
いくら同意があつたとはいえ、翌朝 ボコられるのも覚悟していた
から、

あつさりした柔軟さには 驚いた。

もつとも、真知子の「友達」の定義は、世間の恋人よりも厳しい規定
定だったけど。

「友達」に昇格できたときは、昇給したときよりも嬉しかった。
つていつたら、俺はマゾなんだろうか？

嫁には「あんだけ強引に押し倒しておいてMはありえない」といわ
れてるんだけど。

あの夜から半月後の話だ

「現状レポート、早くもってこい」

真知子にメールを送った

提出期限まであと3日あるのだが、わざと催促した。

提出書類に慣れてない真知子を育ててやりたい気持ちと。
会いたい気持ち半分と。

「来たらその場で添削してやる。 20時半までなら待てる」
待てなかつたら？ 押しかけるまでだ。

我ながら「待てない」高校男子だ。どうしていいか分からない程、

手に追えない自分

合点したところで、家からの荷物を こっそり取り出した。
…マグカップ。

彼女がこの職場に来た時用に使ってもらおうと、内緒で用意した。
どんな顔するか、楽しみだ

コンコン、と小気味の良い音が部屋に響いて すぐに扉が開いた。

「失礼します。物流部の蕃昌です」

「真知子、俺しかいない。入れよ」

作った顔が お互い崩れる。

改めてみる真知子は、鼻屑目に見ても 可愛いと思う

遅くなってごめんね、と無邪気に駆け寄る姿が 気持ち良い。

誰にでも駆け寄るか？と前に聞いたら、そういうものじゃない？と
返されたことがある

嫉妬に駆られたが、昔よりは 嬉しそうにそばへ来る姿をみて 自
信を持つことにした

真知子には、「そのイケメン面、悪用しないでくれる？ 心臓に悪
い」といわれた

手前味噌で恐縮なんだが、他の女性から言われなくてもない。

ただ、自分の相手が「素直に、カッコいいね」と言えない天邪鬼な
ので、有効手段になってるのか分からない以上、不安にはなってる
本当に、天然で人を振り回す奴だ…まあ 天邪鬼自体が鬼だからな、
びったりだ

「コーヒーでいいか？」

声を掛けた真知子が 生返事をする。

いつもなら、使い捨ての紙コップだが、今日は マグカップが用意

されていることに気がついたらしい

「それ、見覚えあるな…」

それもそのはず。家にあるのを持ってきた。

「真知子が 前に 俺の家で使ったやつだよ」

真知子の顔が一瞬で破顔した

「ワタシ用になるわけ？」

ああ、と 頭を撫でる

「気軽に本社へ来い。それで本社に慣れる。」

お前が今まで教わりそびれてきた仕事は、俺が教えてやる

嬉しそうに「やったー」とマグカップに暖を求める手が 楽しそうだ
真知子が 一瞬、涙ぐんだように見えて 言ったそばから気が変わった。

「ちょ、ちよつと！ せつかく入れてくれたんでしょ？ 飲ませてよ」
抗議も無視して 強引に押し倒した。

その後の展開は、言わなくても「大人同士」の話だ。

ちなみに、レポートは 家で読んだ。

ぐったりした真知子が隣で寝ている中、赤ペンを引いていた。

「赤ばつかりだ。」

呆れたため息半分、読んだときの真知子が「すごい」とまたキラキラする顔が見たくて、顔が緩むのが分かる

実は、初対面の頃から、顔とか体つきがタイプだったから、一目惚れに近かったが、

仕事を教えたとき、本当に嬉しそうに笑う顔に惚れこんだ。

いつも、自分のパートたちと話しているとき、楽しそうに振舞っている。

人に教わり、覚えて自分の糧にするのが、本当に嬉しいんだろう。

一途で負けん気が強くて、向上心が高くて。「教えてくれてありがとう」その顔にいつもクラクラする

「早く 俺に追いつけよ」

寝顔にキスして、同じ夢をみれるのを祈って眠った。

俺の机の隣で「やったー」って言った顔、可愛かったなあ…そんなことを思いながら。

プロポーズしたのは、これから1年後だった。

彼女は、男ばかりの物流センターで勤めている。

ただでさえ、可愛くて一途に職場の仲間を思いやる良い子。肉体労働者だから、凄いスタイルいいんだぜ？でもって、勘違いさせる天才。

これで、仕事も出来るようになったら、どうなる？

ウカウカしたら他の男に持っていかれそうで、「すごい」と笑ってくれているうちに、さっさと切り出した。

独占欲って、そういうものだろ？

俺たちが結婚したとき、他所で波乱があったらしんだが… それはまた別な話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5260s/>

ただいま 検品中

2011年10月5日10時52分発行